

領域略称名：西アジア都市

領域番号：5001

令和2年度科学研究費助成事業
「新学術領域研究（研究領域提案型）」
に係る中間評価報告書

「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の
発生と変容の学際研究」

領域設定期間

平成30年度～令和4年度

令和2年6月

領域代表者 筑波大学・人文社会系・教授・山田 重郎

目 次

研究組織

1 総括班・総括班以外の計画研究	2
2 公募研究	3

研究領域全体に係る事項

3 研究領域の目的及び概要	5
4 審査結果の所見で指摘を受けた事項への対応状況	7
5 研究の進展状況及び主な成果	9
6 研究発表の状況	14
7 研究組織の連携体制	19
8 若手研究者の育成に関する取組状況	20
9 研究費の使用状況・計画	21
10 今後の研究領域の推進方策	22
11 総括班評価者による評価	24

研究組織

(令和2年6月末現在。ただし終了した研究課題は終了時現在、補助事業廃止の研究課題は廃止時現在。)

1 総括班・総括班以外の計画研究

研究項目[1]	課題番号 研究課題名	研究期間	研究代表者 氏名	所属研究機関・部局・職	人数 [2]
X00 総	18H05443 西アジア都市文明論	平成30年度 ～ 令和4年度	山田 重郎	筑波大学・人文社会系・教授	11
A01 計	18H05444 西アジア先史時代における生業と 社会構造	平成30年度 ～ 令和4年度	三宅 裕	筑波大学・人文社会系・教授	7
A02 計	18H05445 古代西アジアにおける都市の景観 と機能	平成30年度 ～ 令和4年度	山田 重郎	筑波大学・人文社会系・教授	6
A02 計	18H05446 古代エジプトにおける都市の景観 と構造	平成30年度 ～ 令和4年度	近藤 二郎	早稲田大学・文学学術院・教授	12
B01 計	18H05447 古代西アジアをめぐる水と土と都 市の相生・相克と都市鉱山の起源	平成30年度 ～ 令和4年度	安間 了	徳島大学・大学院社会産業 理工学研究部・教授	16
C01 計	18H05448 中世から近代の西アジア・イスラ ーム都市の構造に関する歴史学的 研究	平成30年度 ～ 令和4年度	守川 知子	東京大学・大学院人文社会 系研究科・准教授	5
C01 計	18H05449 西アジア地域の都市空間の重層性 に関する計画論的研究	平成30年度 ～ 令和4年度	松原 康介	筑波大学・システム情報系・ 准教授	18
総括班・総括班以外の計画研究 計 7 件 (廃止を含む)					

[1] 総：総括班、計：総括班以外の計画研究、公：公募研究

[2] 研究代表者及び研究分担者の人数（辞退又は削除した者を除く。）

2 公募研究

研究項目[1]	課題番号 研究課題名	研究期間	研究代表者 氏名	所属研究機関・部局・職	人数 [2]
A01 公	19H05030 メソポタミア外縁における新石器 化から都市化への移行に関する研 究	令和元年度 ～ 令和2年度	小高 敬寛	金沢大学・国際文化資源学 研究センター・特任准教授	1
A01 公	19H05031 化学分析で評価する西アジア先史 社会のヒト・穀物・動物の移動と社 会構造	令和元年度 ～ 令和2年度	板橋 悠	筑波大学・人文社会系・助教	1
A01 公	19H05033 西アジアの都市化と遊牧民交易	令和元年度 ～ 令和2年度	足立 拓朗	金沢大学・歴史言語文化学 系・教授	1
A01 公	19H05043 前3千年紀におけるインダス文明 とアラビア半島の交流関係に関する 考古学的研究	令和元年度 ～ 令和2年度	上杉 彰紀	金沢大学・国際文化資源学 研究センター・特任准教授	1
A02 公	19H05037 サーサーン朝時代の都市とキャラ バン・ルートに於けるゾロアスタ ー教拝火神殿	令和元年度 ～ 令和2年度	青木 健	静岡文化芸術大学・文化芸 術研究センター・教授	1
B01 公	19H05035 イランの石筍・トラバーチンを用 いた西アジアの古気候復元の試み	令和元年度 ～ 令和2年度	南 雅代	名古屋大学・宇宙地球環境 研究所・教授	1
C01 公	19H05032 「寛容」と先例：近世・近代のタブ リーズにおけるアルメニア教徒と ムスリム社会	令和元年度 ～ 令和2年度	阿部 尚史	お茶の水女子大学・基幹研 究院・助教	1
C01 公	19H05034 近代化にともなう灌漑水路と都市 拡張の関係についての地中海都市 比較研究	令和元年度 ～ 令和2年度	佐倉 弘祐	信州大学・工学部・助教	1
C01 公	19H05036 トルコ・カッパドキアの都市文化・ 景観保全に向けた岩窟教会の風化 対策に関する研究	令和元年度 ～ 令和2年度	伊庭 千恵美	京都大学・大学院工学研究 科・准教授	1
C01 公	19H05038 西アジア及び周辺都市に尽力した フランスの都市計画家ユルバニス トに関する研究	令和元年度 ～ 令和2年度	三田村 哲哉	兵庫県立大学・環境人間学 部・准教授	1
C01 公	19H05041 イスラーム期の西アジアにおける 墓地と都市	令和元年度 ～ 令和2年度	大稔 哲也	早稲田大学・文学学術院・教 授	1

C01 公	19H05042 15世紀後半のヘラートにおけるタ リーカの活動と都市文化の発展	令和元年度 ～ 令和2年度	杉山 雅樹	京都外国語大学・非常勤講 師	1
公募研究 計 12 件 (廃止を含む)					

[1] 総：総括班、計：総括班以外の計画研究、公：公募研究

[2] 研究代表者及び研究分担者の人数（辞退又は削除した者を除く。）

研究領域全体に係る事項

3 研究領域の目的及び概要

研究領域全体を通じ、本研究領域の研究目的及び全体構想について、応募時の領域計画書を基に、具体的かつ簡潔に2頁以内で記述すること。なお、記述に当たっては、どのような点が「革新的・創造的な学術研究の発展が期待される研究領域」であるか、研究の学術的背景や領域設定期間終了後に期待される成果等を明確にすること。

【研究課題】

紀元前4千年紀の後半、南メソポタミア（現イラク南部）において人類史上初の都市が成立した。大型公共建築物と城壁を持ち、種々の職業に従事する大人口が一定のヒエラルキーのもとに統合され、周辺世界の政治と経済の核となる複雑社会がここに誕生する。このような都市文明という社会様式は、前3～2千年紀には、メソポタミアとその周辺の広域に拡散し、西アジア各地に多数の都市が成立した。こうして、都市を中心に地域の在り方が決定づけられる政治的・社会的・経済的・文化的構造が西アジア全域に形成された。その後、大人口が集住する都市は西アジア以外の各地でも様々な形態で出現し、現在、地球上の各地に及んだ都市主導型の社会様式は、地球の規模で人間社会の在り方を決定づける主要な原理になっている。

西アジアは、農耕、牧畜、冶金、文字記録、一神教、そして都市文明といった人類史に大きな影響を与えた文化的革新が地球上で最も早く生じた地域であり、西欧世界の思想的源流であるユダヤ・キリスト教文化の故地でもある。そのため、19世紀以来、多くの考古学的調査が行われ、イラク、イラン、シリア、トルコ、パレスチナを中心に何百もの都市遺跡が調査された。これらの考古学的発見を通じ、各地で都市の景観と機能が明らかにされてきた。そして、紀元前3200年ころ都市で発明された世界最古の文字システムが、楔形文字書字法として洗練されながら西アジア各地に伝播し、複数の言語の記述に応用されたことも知られるようになった。この結果、前3千年紀から紀元前後の時代に至るまでの長期間、古代世界において出色の文字文明が西アジアにおいて繁栄し、大量で種々の文書に、都市社会の様相が記録された。

このように、古代西アジアは、都市主導型の文明が地球上で最も早く高度に発達した地域であり、豊富な考古学的資料と保存性の高い媒体（粘土板）に書かれた多くの文字史料によって、都市文明の発生とその変容に関する大量のデータを提供する。人類の都市との関わり方の原点であり、人類史上最古の都市をめぐる濃密な歴史的経験であった古代西アジア都市の諸相の解明は、都市の本質を問うために決定的な価値がある。古代西アジア都市を、民主的なギリシア都市に対する専制的オリエント都市とみる西欧の古典的・傾向的理解は批判されて久しいが、西アジアにおける都市の発生と変容、都市の環境や人間社会との相互影響関係、都市景観の様相、都市の諸機能を種々の史資料に照らして実証的に解明し、現代に至るまでの都市のタイポロジーに照らして歴史的に評価する試みは、都市型社会の理解に向けた意義深い課題として未完のまま残っている。この課題に取り組むことが本領域の目的である。

【融合領域】

本領域研究は、既存の学問分野の枠に収まらない融合領域を創成し、学際的連携によって人間社会の都市化という歴史的現象の解明を目指す計画である。その中核的な役割を果たすのは、**考古学**である。19世紀以来、西アジア各地の都市遺跡で発掘調査が行われたが、当初は神殿・宮殿などの大規模建築物、権力者の残した見栄えのするモニュメント、粘土板文書に代表される文字史料などの発見に調査目的が限定されていた。しかし、調査地域が広がり、調査方法が精密化するにともない、調査対象も、市民セクターを含む都市構造、都市の周辺に広がる村落の分布、都市に関連する水利設備や交易路、家畜の放牧・遊牧と関連する痕跡などといった広義の「都市景観」に及んできた。現在では、都市をトータルに分析する研究原理としての考古学の重要性はますます高い。

考古学と連動し、都市で営まれた人間社会の諸相の研究に寄与する学問分野が**文献学**である。先述の通り、南メソポタミアで前3200年頃に発明された書字技術は、西アジアの広域に伝播し、各地の都市遺跡からは、粘土板や石碑をはじめとする種々の媒体にシュメル語、アッカド語、エラム語、ヒッタイト語、ウガリト語、古代ペルシア語などで書かれた大量の楔形文字文書、ならびに石材、オストラカ、パピルス、羊皮紙などに書かれたアラム語、ギリシア語の諸文書が知られている。こうした豊富な文書史料は、王権や神殿を中心とした政治と行政、農耕・牧畜・手工業・交易のような産業、法と社会制度、建築・数学・天文学などの科学、宗教と儀礼、文学と思想など、都市とその周辺で営まれた人間社会の諸相について豊富なデータを提供する。

考古学と文献学に加え、都市を取り巻く環境、資源、ならびに農業・工業・交易等の産業の分析には、物質科学分野の参画が不可欠である。具体的には、都市遺跡に由来する動植物の遺存体を同位体分析などによって分析し、食生活や農耕・牧畜の動植物学的な詳細を解明すること、都市内部やその周辺に見られる鉱物・石材・土壌（粘土板やレンガの素材）・水を採取して化学組成を調べ、都市に供給された金属・石材・河川堆積物の起源とそうした資源環境の地理的広がりを把握すること、衛星画像を用いて灌漑・農業用水の取水システムの変化を追跡し、都市への水の供給システムの変遷を探ること、地震や災害の都市への影響を地球科学的な分析によって評価することなど、都市と環境・資源の関係についての極めて重要な問題が扱われる。

こうした考古学・文献学・自然科学の学際的連携によって、都市文明の諸要素が芽生えた先史時代から都市が誕生して変容を重ねていく前 3000 年頃をへてヘレニズム・ローマ期に至るまでの期間に、都市空間はどのように構成され、そこでどのような社会が営まれ、いかなる思想が生まれたのか、都市とその周辺の村落や遊牧社会はどのような関係にあり、都市と都市はどのようなネットワークで結ばれたのか、都市文明は周辺の環境にどのような影響を与え、環境は都市の在り方をどのように規定したのか、といった一連の問題を通時的・共時的に明らかにすることが本領域研究の課題である。

「都市とは何か」という大きな命題を古代西アジアという都市文明の古層に探る本領域の目的は、西アジアの隣接地域の都市、ならびに後代の西アジア都市をもある程度射程におさめ、古代西アジア都市の特徴を相対的に評価することによって補完される。これにより、古代西アジアの都市文明の個性を浮き彫りにし、その後代への影響を考察すると同時に、現代人に忘却された西アジア都市文明という歴史的経験を再発見して、都市文明と人間社会の関係を深く広く探求し、現代の都市主導型文明を内省的に再考して、サステナブルな未来をもたらすための都市文明論を提示することが、追及すべき到達点である。こうした到達点を視野に、本領域研究は、西アジアと隣接する古代エジプトの都市研究と中世から現代に至るまでの西アジア都市を研究する複数の計画研究を含めている。葬祭装置の発達が顕著で、都市遺構の発見に乏しく、かつては「都市なき文明」と呼ばれた古代エジプトだが、近年は、都市型居住地の形成と都市化の詳細が積極的に研究され始めた。また、中世以降の西アジア都市は、古代の都市プランを継承しつつ、イスラーム都市、近代都市として変容を遂げた。こうした研究分野をカバーするエジプト学、イスラーム学、西アジア史学、社会人類学、都市計画学、都市社会学、文化遺産学等の研究者が本領域に参画する。

こうして、本領域は、異なる学問分野がそれぞれの分野内に孤立しては獲得できない広い視野に立って、学際的に協働することで、古代西アジア都市という大きなテーマに臨み、そこに都市文明の本質を考究する実証研究と理論研究を実践する。具体的には、西アジア都市文明の発生・拡散・変容の歴史的プロセス、ならびに都市の景観と機能の多様性を、地域的な広がりを踏まえながら分析し、古代から現在までの西アジア都市の在り方を通時的・共時的に俯瞰する。同時に、長期にわたる都市化の歴史において、都市文明が地球環境にどのような影響を及ぼし、また、どのような社会観やイデオロギーの変化を人間社会にもたらしたのかを人類学的あるいは文化論的に考察し、長い歴史を通して累積された都市文明の姿に照らして現代の都市文明の在り方を省察し、現代社会に対して有意義な提言を導き出すことを目指す。

【期間終了後に期待される成果】

フィールドワークと資料研究に基づいて、西アジア都市の諸相に関して、先端的個別研究を学術雑誌に多数発表すると同時に、古代西アジア都市文明の歴史的展開に関して、最新の研究成果を踏まえて、国際標準になる「総論」を提示する。

都市文明誕生の前提となる先史時代から前 4 千年紀末の都市の発生をへて、ヘレニズム期にいたるまでの古代西アジア各地の多様な都市の姿を、異なる時代と地域を専門とする国内外の研究者が協働して、時空間の比較格子の中に捕捉した前例はない。先行研究を分担して渉猟し、批判的に検討して、領域研究の参加者が自ら行う個別研究の成果を上乗せすることで、都市文明の発生と変容の過程を浮き彫りにする。また、古代西アジア都市の諸相を後代の都市のそれと対比し、古代から近現代までの西アジア都市の姿を通時的に把握する。そのうえで、「都市の本質」に関する包括的理解に到達すべく、人間社会と都市文明の関係について文明論的見地から論じる。

これら研究活動の成果の一部として、計画研究が分担して執筆する英文の研究叢書「Historical Aspects of West Asian Cities」（仮題）を公刊し（後述「10. 今後の研究領域の推進方策」）、今後数十年間、国際学界において基本的な学術業績として参照され得る最新の「総論」を作成する。また、この叢書をベースとして、「都市の本質—西アジア都市文明の歩みに照らして」（仮題）のタイトルで、「都市文明の発生と変容」、「都市の諸類型」、「現代都市文明の課題と展望」をコンテンツとする和書を刊行する計画を実現し、研究成果を一般社会に還元する。

4 審査結果の所見で指摘を受けた事項への対応状況

研究領域全体を通じ、審査結果の所見において指摘を受けた事項があった場合には、当該指摘及びその対応状況等について、具体的かつ簡潔に2頁以内で記述すること。

審査結果の所見として、本領域計画の実施に当たって考慮すべき点は、大きく以下の2点であった。

【申請結果の所見において指摘を受けた事項】

第1点は、古代西アジア研究から、人類社会における都市文明の本質の解明、ならびに都市文明の将来への提言を導くことの困難さを指摘するものである。例として、所見の一部を引用する。

・「古代西アジア都市の研究としては着実な成果が期待できるものの、本研究領域がそのような実証的研究を土台に、いかにして人類社会における都市文明の本質を解明し、都市の未来に向けて提言するところにまで到達するかについては、領域推進の計画・方法を見直し、公募研究による強化が必要である。」
・「本研究領域においては、考古学的手法を主軸とする古代西アジア都市の研究を現代都市研究そして普遍的な都市文明論へと発展させていく具体的な計画・方法に不明瞭な部分がある。この点については、研究項目C01の研究計画「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」の研究計画・方法を再考するとともに、研究分担者の追加や公募研究の重点的配置によって補強するなど、特段の改善が必要である。」

第2点は、考古資料の化学分析や地質調査を通じて、西アジア都市の都市化の背景となった自然環境と都市化の進展にともなう環境変化を分析・研究する計画研究4（研究項目B01）の予算規模の大きさとそれに見合う成果を求めるものである。以下がその所見である。

・「本研究領域の全体経費のうち、計画研究B01に係る経費が占める割合は高い。とはいえ、当該計画研究の目的に照らして一定の妥当性は認められるため、本研究領域全体の目的に寄与するものとして認めるものの、予算規模に見合う研究成果が得られるよう努力いただくことを期待する。」

【対応状況】

第1点に関しては、特に現代の西アジア都市の都市計画と問題を研究課題とする計画研究6（研究項目C01）に寄与する研究者をより多く集め、公募研究とも連携しながら、研究の裾野を広げることを求めた。

その結果、採択時には、都市計画学、文化人類学、文化財研究を専門とする4名の研究者（松原、木村、谷口陽子、田中）からなっていた計画研究6は、人材面で強化され、分担者は4名から18名になった。そこには、都市計画（松原、中野、田中）、文化人類学（木村、田中）、文化財研究（谷口陽子、山内）、に加え、近未来交通研究（谷口守）、防災復興計画研究（廣井）、都市工学（中島）、国際協力（武藤）、トルコ、エジプト、シリア、中央アジア、北アフリカ、南アジアなどの各地の諸都市でフィールド・ワークに従事する地域研究の研究者（川本、渡邊、塩谷、柳沢、田中、杉本、守田）が含まれており、少ない予算ではあるが、より多角的に西アジアの現代都市を研究する陣容が整った。

また、12件の公募研究の内、その半数の6件は、研究項目C02と関連しており、イラン、エジプト、アフガニスタン、トルコ、フランス、地中海沿岸各地の都市計画、社会史、文化遺産をめぐる研究であり、現代の西アジアとその周辺の都市の研究を行っている。これもまた近現代の都市研究の強化に貢献しているといえる。

今後、領域研究が研究期間の後半に差し掛かるのを機に、研究項目C01と総括班をハブに都市の景観・構造と都市社会の関わりを再考し、西アジアの枠に必ずしもとらわれずに「都市とは何か？」という命題に答えるべく、社会学者や都市人類学者を加えた研究会やシンポジウムを企画したい。それによって、古代から現代までの西アジア都市研究の成果をベースに、より大きな「都市文明」というテーマについて考察する気運を醸成していきたい。

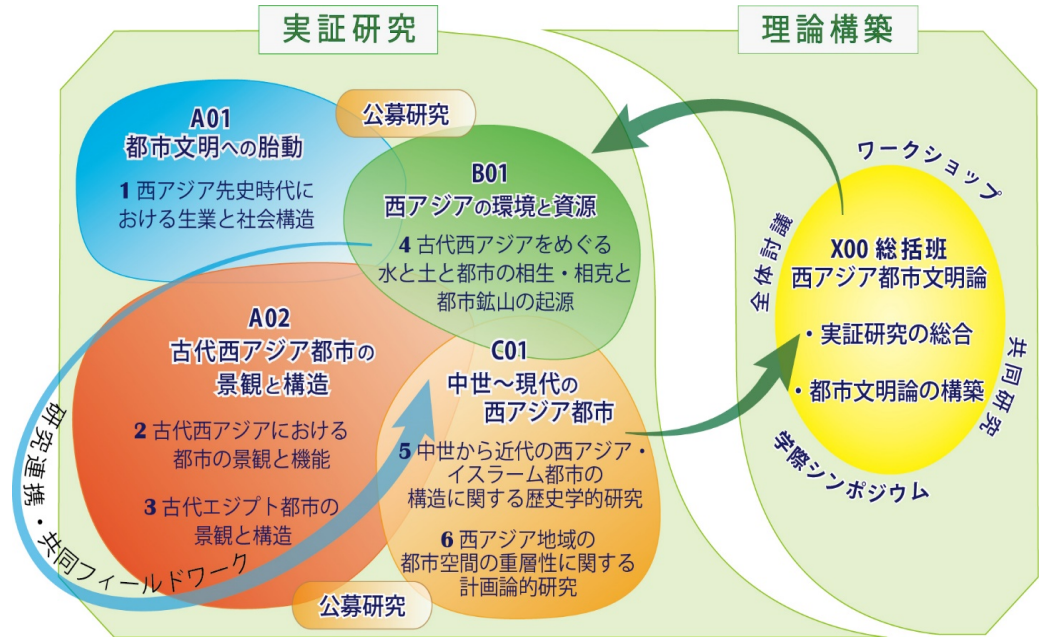
第2点に関しては、メソポタミアとその周辺における都市化の環境的基盤となった水環境や地形変化を追跡するための資料収集は、順調に進んでいる。また、もっとも大きな予算を計上したマルチコレクター型ICP質量分析システム一式は、予定通りに筑波大学に設置され、調整が行われている。今後は、領域

内の各計画研究のフィールドワークによってもたらされている試料を測定しながら習熟を繰り返し、データの集積が進むものと考えられる。西アジアの現地の研究者との連携も深めながら、試料の収集の円滑化をはかり、可能な限りのフィールドワークを実施することで、鉱物資源の起源とその都市への集中の課程を追跡する「冶金考古学」的研究が進展することを期待している。

5 研究の進展状況及び主な成果

(1) 領域設定期間内及び中間評価実施時までには何をどこまで明らかにしようとし、中間評価実施時までにはどこまで研究が進展しているのか、(2) 本研究領域により得られた成果について、具体的かつ簡潔に5頁以内で記述すること。(1)は研究項目ごと、(2)は研究項目ごとに計画研究・公募研究の順で記載すること。なお、本研究領域内の共同研究等による成果の場合はその旨を明確にすること。

本領域は、西アジアにおける都市の誕生、変容、社会的機能、多様性を学際的方法で、通時的・共時的に研究するために、A01「都市文明への胎動」、A02「古代西アジア都市の景観と構造」、B01「西アジアの環境と資源」、C01「中世～現代の西アジア都市」、ならびにX00「西アジア都市文明論」(総括班)の5つの研究項目を設定している。こうした諸項目を公募研究によって補足し、領域全体として西アジア都市の諸相を多角的・通時的に把握したうえで、研究項目X00(総括班)の主導により、古代西アジア都市文明の特徴と後代への影響を歴史的に研究し、文化論的に評価し、都市・人間社会・環境の相互関係、都市の類型、といった問題を総合的に論じることを目標としている。以下では、X00「総括班」を除く、各研究項目における研究の進捗状況と成果について記す。



(1) 研究の目的と進展状況

【研究項目A01「都市文明への胎動」】

計画研究1「西アジア先史時代における生業と社会構造」：本格的な都市社会が成立する以前の西アジアの新石器時代において、近年その実態が明らかにされつつある、多くの人口が集中する大規模集落(メガサイト)、儀礼祭祀に深く関係する公共建造物や祭祀センター、さまざまな器物の専門的生産、長距離交易ネットワークの発達などの現象を新石器時代にみられる「都市的様相」として捉え、都市という存在、あるいはその本質についての理解を深化させるべく、諸研究を進めている。これら諸研究の進展状況は、開催した研究集会などの機会を通じ、研究組織内での共有を図ってきた。また、日本西アジア考古学会の大会(2019年)における新石器時代に関する特別セッションでの発表や学会誌である『西アジア考古学』21号の特集に寄せた論考は、本研究課題の中間報告的性格も有しており、現時点での成果を本研究領域外の学界へも広く発信している。昨年度までに10回開催した研究集会を通じて、トルコ、アルメニア、フランスなどの研究者を招聘し、最新の研究動向をはじめ有益な情報交換をおこなうことができた。特にトルコの研究者とは人骨の安定同位体比分析について共同研究を進める体制を構築することができ、今後の研究の推進にさらに弾みがつくものと期待される。

【研究項目A02「古代西アジアにおける都市の景観と構造」】

計画研究2「古代西アジアにおける都市の景観と機能」：前3千年紀から紀元後3世紀までの様々な時代を専門とする考古学、文献学、歴史学、地理情報学、環境史などの研究者が参画し、メソポタミアとその周辺における都市の景観と社会的機能の変容を通時的に把握することをめざして、時代とテーマに応

じて、(1) シュメル都市研究、(2) 古・中バビロニア時代研究、(3) 中・新アッシリア時代研究、(4) 新バビロニア時代研究、(5) ヤシン・テベ遺跡発掘調査、の5つに研究班に分けて諸研究を進めた。メソポタミアの都市景観、都市ネットワーク、都市社会、都市における祭儀空間、宗教・思想活動、空間認識、考古学調査などをめぐって12回の研究会を実施した。シュメル初期王朝時代ラガシュ（ギルス）出土の行政文書研究、古バビロニア時代と中アッシリア時代のテル・タバノ出土文書研究（書簡、行政文書、契約文書）、新アッシリア時代の王碑文、書簡、行政文書の研究、新バビロニア時代の契約文書の研究、セレウコス朝期～アルシャク朝期の天文日誌研究などの文書研究が行われた。また、考古学分野では、イラク（クルド自治区）のヤシン・テベ遺跡の発掘が継続的に行われ、新アッシリア時代の居住址、豊かな副葬品を伴う未盗掘墓、水路跡など貴重な発見が続いている。

計画研究3「古代エジプト都市の景観と構造」：ナイル川の流域が領域国家として早くから発達したエジプトは、かつては「都市なき文明」といわれたが、今や都市化の諸相が明らかになりつつある。この計画研究では、前4千年紀の先王朝時代から古代末期までの古代エジプト各地の都市の景観とその構造について、都市景観・建築とネットワーク、王権・神殿・墓地と都市構造、政治・行政と社会構造などを主要テーマとして、文書史料と考古資料の双方から通時的・共時的に解明することを目指している。ヒエラコンポリス遺跡（先王朝時代）、ダハシュール北遺跡（中王国時代）、テーベ西岸の複数の高官の墓地（新王国時代）、サッカラ遺跡（新王国時代）、中エジプトの都市遺跡アコリス（末期王朝・ヘレニズム時代）における発掘調査を実施。また、公刊されている考古資料、文書、既往研究の収集をおこない、それを用いた研究として、各地の都市・集落の発展史や都市空間と墓地空間の関係、埋葬施設と社会階層の関係、都市と祝祭の関係、古代エジプト語の「居住地」を表わす種々の用語、など、多数の個別研究が実施されている。これまでに5回の研究会・国際シンポジウムを実施。

【研究項目B01「西アジアの環境と資源」】

計画研究4「古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源」：地球科学、岩石学、同位体分析学、微古生物学、土壌分析化学、古環境学、災害科学などの専門研究者が参画し、都市化とともに西アジア各地に生じた資源の都市空間への集中（食材、土、石材、金属、水など）、コミュニケーション網やテクノロジーの発達などを、西アジア各地の堆積物、構造物、人工物の分析によって明らかにし、都市と環境の相互影響関係を地球科学的・物質科学的に解明する。これまでに、メソポタミア下流域ウルク近郊の13mロガー試料を採取分析し、古環境の調査を進めている。また、ザブ川上流のジャルモ遺跡で地形年代測定用試料を採取し、イラク各地で出土した黒曜石の組成分析により由来を調べるなど、考古学研究をサポートした。また、都市への鉱物資源の集中とその鉱物の原産地を特定するべく、主要な分析機器であるマルチコレクター型ICP質量分析システムを筑波大学に設置し、領域の分析部門としてのプラットフォームを形成した。

【研究項目C01「中世～現代の西アジア都市」】

計画研究5「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」：西アジア史、中東地域研究、イスラーム建築史等を専門にする研究者が参画し、中世から近世・近代の西アジアの都市を対象とし、(1) 政治的中核都市とその広域ネットワークの地理空間的変容過程、(2) 伝統的都市の空間構造と都市を支える都市文化、(3) 西アジアの内陸部と沿岸部における都市形成と時代性（特に近世・近代）について、「都市」を中心とした地域ネットワークの盛衰、および「イスラーム都市」の構造や機能の解明を試みている。上述の3つの項目の内、中間評価実施時までには、特に(1)と(2)を重視し、西アジアの政治的中核都市を中心とした地域ネットワークの盛衰、および「イスラーム都市」なるものの社会空間構造の本質やその機能・実態を明らかにすることに重点を置いて検討してきた。そのため、エジプト、イラン、アゼルバイジャン、トルコ等でフィールド調査を行い、メンバー個人が特定の都市に関して個別に研究を進めるとともに、国内・国際研究会を14回開催して意見交換を行い、比較の視点を涵養することに努めた。

計画研究6「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」：都市計画論、社会人類学、文化財科学の研究者からなり、現代の西アジア都市にみる伝統的街区と新興地区の共存、異なる文化的帰属意識を持つ多様な住民の共生・対立と文化財保全の在り方、災害からの都市の復興に注目し、西アジア都市の重層的構造を分析する研究グループである。以下のように9つの課題が研究テーマとして具体化され、研究が実施されてきた：(1) 旧市街の開削道路と空間整備の歴史的評価－西アジア・アーバニズ

ム、(2) 新自由主義の都市計画と住民活動の人類学的研究、(3) 考古学遺産の位置づけと活用、(4) 地域比較と文化交流にみる都市史研究、(5) アルジェリアとトルコのスラム政策-ビドンヴィルとゲジェコンドゥ、(6) 乾燥地帯の水利技術と庭園文化のデザイン、(7) 文化遺産の劣化と構成材料に関する理化学的調査、(8) 日本・東アジア・中央アジア・南アジア・カフカース・ヨーロッパとの地域比較(レビュー的研究)、(9) 震災・戦災と都市復興協力の展望(レビュー的研究)。諸研究の成果を共有すべく8回の研究会を実施した。

(2) これまでの主な成果

【研究項目A01「都市文明への胎動」】

計画研究1「西アジア先史時代における生業と社会構造」：新石器時代の多岐にわたる様相を対象にしてテーマごとの研究が個別に進められているところである。大規模集落の研究は、資料的な制約はあるものの、新石器時代の前半にまで遡る事例があることや、農耕社会が確立された後、むしろ集落規模は縮小することが確認され、新たな生業の開始とは負の相関関係にある可能性が高くなった。公共建造物の研究では、これまで南東アナトリアとユーフラテス中流域の事例が注目されてきたが、構造や一部の設備などに違いがみられるものの、南レヴァントやアナトリア高原でも類似する事例が確認され、西アジアの広範な地域に分布することが明らかになった。これらの事例は決して特別なものではなく、特に新石器時代前半においては集落の一般的な姿である可能性が高くなった。一方、こうした公共建造物も農耕牧畜に基盤を置く社会が確立された新石器時代の後半になると消失してしまい、大規模集落の消長と連動しているようにみえることは興味深い。また、そこで催行された儀礼祭祀については、南東アナトリアの事例を参照すると、祖先祭祀であった可能性が高く、共通の祖先に連なる血縁組織が形成されており、それが多くの労働力の組織的動員に大きな役割を果たしたと考えられる。専門的生産の研究では、新石器時代前半の石製容器や石製ビーズの製作にはそうした労働力の組織的動員の可能性を想定できる。スタンプ印章による物資管理システムの発達は、新石器時代の後半に顕著になり、集落の様相とは連動していないようにみえることも興味深い発見である。

公募研究「メソポタミア外縁における新石器化から都市化への移行に関する研究」(小高敬寛)：メソポタミア東縁、シャカル・テペ遺跡(イラク・クルド地区)の発掘調査を行ない、都市化の直前にあたる後期新石器時代～銅石器時代の文化層を検出した。出土遺物にはメソポタミアに共通する型式の波及がみられた一方、ほとんど知られていなかった強い地域色が認められた。こうした物質文化から、都市化に向かう地域間関係の強化が極めて複雑な過程を辿っていたことが明らかになった。

公募研究「西アジアの都市化と遊牧民交易」(足立拓朗)：ポーランドのクラクフで開催された南レヴァント地方の国際考古学シンポジウムで、これまで金沢大学で調査してきたヨルダン、サウジアラビアで出土した貝製品について長距離交易の可能性について論じ、論文をまとめた。

公募研究「科学分析で評価する西アジア先史社会の人・穀物・動物の移動と社会構造」(板橋悠)：人骨の同位体比分析による個人の食性復元から集落内での食物と埋葬の共有のされ方について検討した。特に新石器時代のアシュクル・ホユック遺跡では、男女の肉消費に大きな違いがあること、タペ・サンギ・チャハマック遺跡では、母子の食生活が類似している一方で、成人女性の個体間には食生活の違いがあることが示された。

公募研究「前3千年紀におけるインダス文明とアラビア半島の交流関係に関する考古学的研究(上杉彰紀)：バハレーン文化古物局および同国立博物館において、同国の墳墓遺跡から出土した副葬品のうちインダス地域からもたらされたとみられる土器および石製装身具、インダス式印章の影響を受けたと考えられる湾岸式印章について調査を実施し、インダス文明の都市社会とアラビア半島をつなぐ海洋交易について検討した。

【研究項目A02「古代西アジアにおける都市の景観と構造」】

計画研究2「古代西アジアにおける都市の景観と機能」：初期王朝時代のラガシュ出土文書にみる供物祭儀の実態、古バビロニア時代タバトゥム市の都市景観、中アッシリア時代タベトゥ市の行政、中バビロニア時代エマル市の行政にみる隣国ヒッタイトの影響、新アッシリア時代の行政首都アッシュル、カルフ、ドゥル・シャルキン、ニネヴェの都市プラン、アルサケス朝時代のバビロンにおけるギリシア系住民と「長老会」の関係など、前3千年紀から紀元前後までのメソポタミア都市に関する楔形文字分野

での論文を公刊。これによって、メソポタミア都市の景観と構造を通時的に研究する試みが、軌道に乗ったといえる。考古学分野では、ヤシン・テペ（イラク・クルド自治区）の発掘により、新アッシリア時代の大型建物、未盗掘墓が発見された。これらの構築物は、イラク北部のアシュル市などアッシリア帝国の中心地域にみられるものと同タイプのものであり、この遺跡が新アッシリア帝国の東方辺境の拠点であったことが決定的な形で証明された。また、楔形文字の献呈碑文の刻まれた青銅製のネックレスを含む多くの金属製品や人骨が発見され、これらの遺物の分析は、この都市の社会的・文化的特徴のさらなる解明につながることは確実である。また運河として用いられたとみられる水路跡も発見されており、当該地域の拠点都市の構造と景観について注目すべき新資料が得られている。こうした考古学調査による成果は、同時代の当該地域についてのデータを含む楔形文字文書の分析と照らし合わせることで、より具体的な復元が可能であり、すでに考古学と文献学の協働による研究も開始している。

公募研究「サーサーン朝時代の都市とキャラバン・ルートにおけるゾロアスター教拝火神殿」（青木健）：サーサーン朝時代の帝国都市と宗教についてのデータを集積し、講演（2019年11月17日、サンシャインシティ文化会館）を行った。

計画研究3「古代エジプト都市の景観と構造」：エジプトで最初の都市化が起こったとされる先王朝時代ヒエラコンポリス遺跡で発掘された施設の出土遺物の理化学的分析により、最古期の穀物発酵の証拠が確認され、施設は最古のビール醸造施設であることが明らかになった。また、初期王朝～新王国時代のメンフィス・テーベ地域の各種の墓の発掘調査や研究により、墓の分布・規模・形状・碑文が検討され、被葬者の社会的地位が解明された。新王国時代の研究では、テーベ・ネクロポリスの景観と配置、ならびに祝祭都市テーベ全体の中での発掘された墓の位置付けについて、検討が進められた。また、文献史料をもとに、新王国時代のエジプト都市の特徴が研究され、当該期の都市は、権力を示威する空間として機能し、宗教、王権、行政、外交と結びつき、これらを支える人々が集住して都市を構成したことが示された。また古代エジプト語における「居住地」を表わす種々の語彙についての研究も行われ、当時のエジプト人の「居住地」の概念について一定の理解に到達した。さらに、テーベ西岸のアメンヘテプ3世のマルカタ王宮の景観と構造の研究も行われた。2019年9月には、海外から研究者を招き、早稲田大学においてアメンヘテプ3世治世下の都市テーベに関する国際シンポジウム *Thebes under Amenhotep III* を開催した。末期王朝・ヘレニズム時代については、中エジプトのアコリスとデルタ地帯のメンフィスならびにコム・アル＝ディバーウで発掘やリモートセンシングによる調査が進展し、これら遺跡の都市あるいは居住地の景観とその変遷が明らかになってきた。

【研究項目B01「西アジアの環境と資源」】

計画研究4「古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源」：ウルク近郊の13m深のロガー試料の分析により、当該地域は、完新世を通して淡水環境であり、また、当地におけるヒプシサーマル期にいたる完新世前期の土壌堆積速度は現在の10倍ほど速かったことを明らかにするなど、ペルシア湾に近いメソポタミア南部の地理的環境変動について重要な事実を突き止めた。マルチコレクター型ICP質量分析システムなど大型測定機材の導入をへて、主要な分析と成果が今後発表されるものと期待される。

公募研究「イランの石筍・トラバーチンを用いた西アジアの古気候復元の試み」（南雅代）：クルディスタン大学（イラン）と共同で、イランの石筍・トラバーチンの¹⁴C年代測定、同位体分析による西アジア地域の過去数千年～数万年間の長期的な古気候復元を目指している。2019年度は、Zendan-e SoleymanとBaba Gurgur地域のトラバーチンとその起源である湧水の¹⁴C年代測定を行い、形成時期を明らかにし、同位体プロキシを用いた古気候復元を準備した。また、トラバーチンの組成に影響を及ぼすダスト成分を明らかにすべく、イラン北西部にエアサンプラーをセットし、大気エアロゾルPM10の採取を開始した。

【研究項目C01「中世～現代の西アジア都市」】

計画研究5「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」：1年目は、2018年10月に、第1回研究会「都市アレppoの歴史と現在」を計画研究6（代表：松原）と合同で開催し、3名の報告者と50名近い参加者（シリアからの留学生・教員を含む）による討論の場を設けた。2019年1月には、バグダードをテーマとした国際研究集会（第3回研究会 *Baghdad: a 1400 year old capital city in West Asia*、東京大学）を主催。さらに、第2、4、5、6、7、8、9回と、海外からの招聘研究者による講演会や研究会を計9回開催し、中世から近代にいたる西アジアやイスラーム世界の都市（アレppo、バグ

ダード、アレクサンドリア、マディーナ・アッザフラー／コルドバ、ダフシュール、ガズナ)を対象に、時代・地域ともに広範囲に事例を集め、比較研究の足掛かりとした。2年目には、エジプト(カイロとアレクサンドリア)で国際研究集会“Network and Urban Landscape in Historical Perspective”を開催(2019年8月)、国内外の14名の研究者が報告した。また「イスラーム世界のフロンティア都市」アインターブとヘラートについて2件の報告もおこなった(10月)。さらに、サーサーン朝期との接合を目指した国際研究集会“Sasanian Cities”(2020年2月)を開催し、イタリア・イギリス・ドイツから中世イラン史を専門とする考古学者・言語学者を招聘して、サーサーン朝都市について議論した。これにより「イスラーム都市」一辺倒ではない、歴史的連続性をもった都市研究に向けた視座を広げることができた。

公募研究「寛容」と先例：近世・近代のタブリーズにおけるアルメニア教徒とムスリム社会(阿部尚史)：17世紀以前のイラン王権とアルメニア教徒との関係を、アルメニア教徒側からの請願書を手掛かりに分析。加えて、アルメニア教徒が多数居住していたタブリーズの都市社会に関して、世帯構成、家族の在り方、職業状況と都市空間との関係を考察した。

公募研究「イスラーム期の西アジアにおける墓地と都市(大稔哲也)：第6回国際マムルーク学会(早稲田大学、6月15-17日)を主催。8月から2月にかけて、シカゴ大学図書館に所蔵されるマムルーク朝関連ワクフ(寄進)文書マイクロフィルム、ならびにカイロのエジプト国立文書館所蔵ワクフ文書、ロンドンの大英図書館所蔵アラビア語写本を調査、研究した。

公募研究「15世紀後半のヘラートにおけるタリーカの活動と都市分文化の発展(杉山雅樹)：ティムール(在位1370-1405年)によってイランのスーフィー教団に対して行われたとされる寄進の記録(17世紀初頭に発見)が偽造であることを新たな証拠を基に指摘し、この文書作成の背景を検討。また、15世紀末ティムール朝治下のヘラートで活動したスーフィー教団ナクシュバンディーヤのシャイフ(師)ジャーミーの書簡を研究し、政権や有力者へのとりなしの役割が、教団発展に果たした役割を解明した。

計画研究6「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究：研究成果が出ているポイントは以下である。：(1)ダマスカスを事例に、ヘレニズム期の都市基盤を考古学的・交通工学的な視点から扱った1968年のエコシャール・番匠谷計画に関する基礎的考察を行い、歴史的評価にも踏み込んだ学術論文を執筆；(2)イスタンブル耐震都市計画やベイルート復興計画を事例に新自由主義の影響という仮説を設定；(3)アンタルヤ旧市街における景観保存と観光開発の動きを研究；(4)イスタンブル、アンカラ、ヒヴァといった諸都市の概要を整理；(5)アルジェの都市計画史の基礎的考察においてスラムの位置づけと計画史を渉猟し、イスタンブルのゲジェコンドゥとの比較研究の必要性を認識；(6)スペイン、モロッコ、チュニジア等の歴史的集落における考古学基盤を検討；(7)トルコ・カッパドキア遺跡の聖シメオン教会(10世紀初頭)を対象に気象ステーション、水分ポテンシャル計、温湿度計等を設置しデータを解析。これらから見える重要なポイントは、考古学的遺産の都市的利用が現在まで続いている事例(都市内遺跡)の内、ダマスカス、アレppo、ベイルート等の都市は、これまでも都市計画において考古学的遺産が、操作・活用の対象となってきたという点である。そうした事例が西アジア地域で数多く発見される事実が、計画研究を進める研究者間で共有されることで、各課題の具体的設定が進行した。

公募研究「近代化に伴う灌漑水路と都市拡張の関係についての地中海都市比較研究(佐倉弘祐)：マラケシュ、メクネス、フェズ(モロッコ)で現地調査を実施し、ケタラ(地下水路)のマラケシュの都市形成過程への影響、メクネスの市内の河川敷を畑として利用する貧困層の経済活動の実態、ならびにフェズ旧市街地内における1000年以上続く水路と生活の繋がりを明らかにした。

公募研究「西アジア及び周辺都市に尽力したフランスの都市計画家ユルバニストに関する研究(三田村哲哉)：20世紀前半にフランスで発達した新たな都市計画ユルバニズムの仏領における萌芽と1931年パリ植民地国際博覧会が開催された当時の興隆を捉え直し、このユルバニズムに基づいて提案されたイスタンブルやアンカラなどの西アジア都市における都市計画の位置づけを検討し、論文を出版した。

公募研究「トルコ・カッパドキアの都市文化・景観保全に向けた岩窟教会の風化対策に関する研究(伊庭千恵美)：トルコ・カッパドキアにおいて、教会内に温湿度計、教会近傍に地盤水分センサーを設置し、測定を継続し、岩窟教会の劣化要因の究明と劣化対策の実験を行っている。

6 研究発表の状況

研究項目ごとに計画研究・公募研究の順で、本研究領域により得られた研究成果の発表の状況（主な雑誌論文、学会発表、書籍、産業財産権、ホームページ、主催シンポジウム、一般向けのアウトリーチ活動等の状況。令和2年6月末までに掲載等が確定しているものに限る。）について、具体的かつ簡潔に5頁以内で記述すること。なお、雑誌論文の記述に当たっては、新しいものから順に発表年次をさかのぼり、研究代表者（発表当時、以下同様。）には二重下線、研究分担者には一重下線、corresponding author には左に*印を付すこと。

【研究項目A01「都市文明への胎動」】

計画研究1「西アジア先史時代における生業と社会構造」

（論文・著書）

- 常木 晃 「西アジア新石器時代のメガサイト再考」『西アジア考古学』21, 83-94 頁 2020年3月。
久田健一郎 「地質学からみたテル・エル・ケルク遺跡」『西アジア考古学』21, 95-104 頁 2020年3月。
有村 誠 「PPNB文化拡散説の検討：ケルク出土石器資料からの一考察」『西アジア考古学』21, 105-116 頁 2020年3月。
前田 修 「レヴァント地方における新石器化プロセスの多様性：黒曜石交易からの視点」『西アジア考古学』21, 117-124 頁 2020年3月。
三宅 裕 「農耕牧畜の時代」の狩猟具：新石器時代の尖頭器をめぐって」『西アジア考古学』21, 125-136 頁 2020年3月。
*H. Hongo, S.Arai, R. Takahashi, C.Y. Gündem, “Transition to Food Production Suspended: A Remarkable Development in the Eastern Upper Tigris Valley, South Anatolia,” In J. Peters et al. (eds.), *Animals: Cultural Identifiers in Ancient Societies? Proceedings of the 2016 International Symposium*, Munich, Documenta Archaeobiologiae 15, 155-172, Rahden/Westf.: Leidorf (2020年2月)
M. Price, and H. Hongo, “The Archaeology of Pig Domestication: Methods, Models, and Case Studies,” *Journal of Archaeological Research*. DOI 10.1007/s10814-019-09142-9 (2019年)
*A. Tsuneki, et al., “Landscape and Early Farming at Neolithic Sites in Slemani, Iraqi Kurdistan: A Case Study of Jarmo and Qalat Said Ahmadan,” *Paléorient* 45/2, 33-51 (2019年12月)
M. Arimura, “Last PPNB Blade Maker in the Pottery Neolithic at Tell Ain el-Kerkh, Northwest Syria: The Demise of PPNB-type Bidirectional Blade Technology,” In S. Nakamura et al. (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in Honour of Sumio Fujii*, Tokyo: Rokuichi Syobou, 191-204 (2019年2月)
O. Maeda, “Stone Balls from Salat Cami Yanı and Hasankeyf Höyük, Neolithic Sites on the Upper Tigris”. In S. Nakamura et al. (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in Honour of Sumio Fujii*. Tokyo: Rokuichi Shobo, 261-268 (2019年2月)
A. Tsuneki, “Revisiting the Turkaka Site in Slemani, Iraqi-Kurdistan”, in S. Nakamura et al. (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in Honour of Sumio Fujii*, Tokyo: Rokuichi Shobo, 243-250 (2019年2月)
*Y. Itahashi, Y. S. Erdal, H. Tekin, L. Omar, Y. Miyake, Y. Chikaraishi, N. Ohkouchi, M. Yoneda, “Amino Acid 15N Analysis Reveals Change in the Importance of Freshwater Resources between the Hunter-gatherer and Farmer in the Neolithic Upper Tigris,” *American Journal of Physical Anthropology* 168, <https://doi.org/10.1002/ajpa.23783>, 1-11 (2019年1月)

公募研究

（論文・著書）

- *板橋 悠 「西アジア新石器時代共同体における食料の利用と共有：テル・エル・ケルク、テル・カラメル遺跡出土人骨の同位体比分析」『世界と日本の考古学：オリーブの林と赤い大地：常木晃先生退職記念論文集』六一書房, 63-74 頁 2020年3月。
上杉彰紀 「インダス考古学の現状と課題」『西アジア考古学』21, 61-80 頁 2020年。
*Özdemir, K., Y.S. Erdal, Y. Itahashi and B. Irvine “A Multi-faceted Approach to Weaning Practices in a Prehistoric Population from İkiştepe, Samsun, Turkey,” *Journal of Archaeological Science: Reports* 27: 13 pages. DOI: 10.1016/j.jasrep.2019.101982 (2019年10月)
*小高敬寛・前田 修・下釜和也・早川裕式・西秋良宏・N.A. ムハンマド・K. ラシード「新石器化と都市化のはざま：イラク・クルディスタン、シャカル・テペ遺跡の第1次発掘調査（2019年）」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会, 15-20 頁 2020年3月。
上杉彰紀「鉄器時代・古代の南アジアにおける土器変遷：土器からみた北インドと周辺地域」『西南アジア研究』89, 1-33 頁 2019年。
A. Uesugi, and V. Dangi, “Change in the Mortuary Practices from the Urban Indus Period to the Post-Urban Indus Period in the Ghaggar Basin with a Focus on the Ceramic Evidence from Farmana (Seman-6) and Bedwa-2,” In S.V. Rajesh et al. (eds.), *The Archaeology of Burials: Examples from Indian Subcontinent*, 1-24 (2019年)

* T. Odaka, O. Nieuwenhuys and S. Mühl, “From the 7th to the 6th Millennium BC in Iraqi Kurdistan: A Local Ceramic Horizon in the Shahrizor Plain,” *Paléorient* 45/2, 67–83 (2019 年 12 月)

【研究項目A02「古代西アジアにおける都市の景観と構造」】

計画研究2「古代西アジアにおける都市の景観と機能」

(論文・著書)

- S. Yamada, “Names of Walls, Gates, and Palatial Structures of Assyrian Royal Cities: Contents, Styles, and Ideology,” *Orient* 55 (2020), 87–104.
- E. Karahashi, “On the Cultic Aspect of the “Reform of Urukagina”: Some Changes in the Festival of the Goddess Baba,” *Orient* 55 (2020), 63–70.
- 唐橋文「シュメール初期王朝時代ラガシュ（ギルス）出土のエ・ミ文書における供物奉獻の祭儀」妹尾達彦編『アフロ・ユーラシア大陸の都市と社会』中央大学人文科学研究所，2020年，511–542頁
- G. Konstantopoulos, “My Men Have Become Women, and My Women Men: Gender, Identity, and Cursing in Mesopotamia.” *Welt des Orients* 50/2 (2020, forthcoming)
- Y. Mitsuma, “BM 30617: An Astronomical Diary from the Reign of Antiochus and His Son Antiochus,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 83/2 (2020), 1–9.
- S. Yamada, “Neo-Assyrian Trading Posts on the East Mediterranean Coast and “Ionians”: An Aspect of Assyro-Greek Contact,” In I. Nakata et al. (eds.) *Prince of the Orient: Ancient Near Eastern Studies in Memory of H. I. H. Prince Takahito Mikasa*, Tokyo, 2019, 221–235.
- S. Yamada, “*sal(a)hum* in the Old Babylonian Letters and the Urban Landscape of Upper Mesopotamia” In P. Abrahami et al. (eds.), *Sur l’art, sur l’histoire et sur la vie, FS O. Rouault*, Oxford, 2019, 38–49.
- S. Yamada, “Sim’alites at Tabatum and the Origin of the Kingdom of the ‘Land of Hana,’” In G. Chambon et al. (eds.), *De l’argile au numérique, FS D. Charpin*, Leuven, 2019, 1189–1207.
- S. Yamada, “Chronographic Styles and the Sense of Chronology in the Neo-Assyrian Royal Inscriptions,” In G.-B. Lanfranchi et al. (eds.), *Writing Neo-Assyrian History*, Helsinki, 2019, 161–181.
- D. Shibata, “Middle Assyrian Legal Documents of Adad-bēl-gabbe II, King of the Land of Māri,” In D. Prechel et al. (eds.), *Beiträge zur Kenntnis und Deutung altorientalischer Archivalien*, Münster, 2019, 409–437.
- D. Shibata, “The Gods of Ṭabetu during the Middle Assyrian Period and their Genealogy,” In G. Chambon et al. (eds.), *De l’argile au numérique, FS D. Charpin*, Paris, 2019, 943–975.
- M. Yamada, “The ‘Overseers of the Land’ in the Emar Texts,” in: I. Nakata et al. (eds.), *Prince of the Orient: Ancient Near Eastern Studies in Memory of H. I. H. Prince Takahito Mikasa*, Tokyo, 2019, 193–210.
- H. Hayakawa, Y. Mitsuma, Y. Ebihara and F. Miyake, “The Earliest Candidates of Auroral Observations in Assyrian Astrological Reports: Insights on Solar Activity around 660 BCE,” *The Astrophysical Journal Letters* 884(L18) (2019), 1–7.
- Y. Mitsuma, “The Relationship between Greco-Macedonian Citizens and the “Council of Elders” in the Arsacid Period: New Evidence from Astronomical Diary BM 35269 + 35347 + 35358,” in J. Haubold et al. (eds.), *Keeping Watch in Babylon: The Astronomical Diaries in Context*, Leiden, 2019, 294–306.
- 西山伸一・H. Hama Abdullah・山田重郎・沼本宏俊・常木晃「アッシリア帝国東部境界を掘る：イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト第3次（2018年）」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会，2019年，109–113頁
- F. Karahashi, “Las mujeres en el period presargónico en Lagash: una vision de conjuncto,” in J. J. Justel et al. (eds.) *Las mujeres en el Oriente cuneiforme*, Alcalá de Henares, 2019, 267–291.
- F. Karahashi, “Female Servants of Royal Household (ar₃-tu munus) in the Presargonic Lagash Corpus,” In A. Garcia-Ventura (ed.), *What’s in a Name?: Terminology Related to the Work Force and Job Categories in the Ancient Near East*, Münster, 2019, 133–146.
- L. Cousin and Y. Watai, “Onomastics and Gender Identity in First-Millennium BCE Babylonia,” in S. L. Budin et al. (eds.), *Gender and Methodology in the Ancient Near East*, 2018, 243–255.
- J. Ikeda, “Relational Units in Cuneiform Writing: Two Cases of Comparative Graphemics,” in I. Nakata et al. (eds.), *Prince of the Orient: Ancient Near Eastern Studies in Memory of H. I. H. Prince Takahito Mikasa*, Tokyo, 2019, 259–268.

計画研究3「古代エジプト都市の景観と構造」

(論文・著書)

- 近藤二郎「古代エジプトの祝祭都市テーベの景観と構造」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究1』2019年3月、107–112頁。
- 近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合望・高橋寿光・福田莉紗「第12次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第26号（2020）。
- 近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合望・高橋寿光・米山由夏「第11次ルクソール西岸アル

- ＝コーカ地区調査概報』『エジプト学研究』第25号(2019)。
- 河合望「メンフィスとその墓地の景観と構造についての予察：古王国時代と新王国時代を中心として」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究1』2019年3月、113-124頁
- 河合望「サッカラ遺跡における新王国時代の墓地の分布と新たに発見された墓地について」吉村作治編『オシリスへの贈物：エジプト考古学の最前線』雄山閣、2020年2月
- 内田杉彦「新王国時代の文字資料にみられる「居住地」の呼称について」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究2』2020年3月、145-150頁。
- Y. Suto, “Akoris in a Diachronic Perspective,” *Preliminary Report Akoris 2018*, Nagoya 2019, 3-6.
- 周藤芳幸「エジプト地方都市の通時的盛衰：アコリスの場合」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究2』2020年3月、151-156頁。
- 西本真一「マルカタ都市王宮における景観と構造」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究2』2020年3月、157-159頁。
- 長谷川奏「古代末期のメンフィス水辺景観に関する若干の覚え書き：考古学とリモートセンシングのコラボレーションのために」吉村作治編『オシリスへの贈り物：エジプト考古学の最前線』雄山閣、2020年2月、160-166頁。
- S. Hasegawa, and S. Nishimoto, “Recovering the Landscape of the Waterfront at Lake Idku: Based on Archaeological Survey at Kom al-Diba,” *Proceeding of the 6th Delta Survey Workshop*, Durham University (in press).
- E.A.E. Attia, E. Marinova and M. Baba, “Archaeobotanical Studies from Hierakonpolis: Evidence for Food Processing During the Predynastic Period in Egypt,” In A.M. Mercuri, A.C. D’Andrea, R. Fornaciari and A. Höhn (eds.), *Plants and Humans in the African Past: Progress in African Archaeobotany*. Springer International Publishing, 2018, 76-89.
- 矢澤健「称号から見たダハシュール北遺跡の中王国時代の被葬者像：58号墓を手掛かりとして」吉村作治編『オシリスへの贈り物：エジプト考古学の最前線』雄山閣、2020年2月、194-201頁。
- (主催シンポジウム)
- International Symposium: “Thebes under Amenhotep III,” Waseda University, September 9, 2019.

【研究項目B01「西アジアの環境と資源」】

計画研究4「古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源」

(論文・著書)

- A. Saddique, Y. Kon, R. Anma, H. Masuda, P. Bhattacharya, Y. Yokoo, S. Bipulendu Basak and K. Shinoda, *Source of U and Th in a paleobeach groundwater aquifer at Cox’s Bazar, southeast Bangladesh: Groundwater for Sustainable Development*, 2020, doi.org/10.1016/j.gsd.2020.100332.
- 安間 了・常木 晃・三宅 裕「イラク国北部 Jarmo 遺跡およびトルコ国南東部 Hasankeyf 遺跡出土の石器材黒曜石の化学組成と原産地推定」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究2』、2020年3月、197-204頁。
- 黒澤正紀・池端慶・荒川洋二「古代西アジアにおける金属利用と都市鉱山の起源に関する基礎的検討」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究2』、2020年3月、173-180頁。
- 横尾頼子・浅井公輔・堀井彩衣・濱口弘平・申キチヨル・安間 了・メラバニ シバ「イラン8都市の月別降水の化学組成」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究2』、2020年3月、181-186頁。
- 中野孝教「アイソスケープと考古学」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究2』、2020年3月、163-172頁。
- 堀川恵司・南 雅代・安間 了「イラン北西部アリ・サドル洞窟のつらら石の U/Th 年代、¹⁴C 年代、炭素・酸素安定同位体比」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究2』、2020年3月、187-195頁。
- A. Tsuneki, K. Rasheed, N. Watanabe, R. Anma, Y. Tatsumi, and M. Minami, “Landscape and Early Farming at Neolithic Sites in Slemani, Iraqi Kurdistan: A Case Study of Jarmo and Qalat Said Ahmadan,” *Paleorient* 2 (2019), 33-51頁。
- H. Azizi, R. J. Stern, G. Topuz, Y. Asahara, H. S. Moghadam, “Late Paleocene Adakitic Granitoid from NW Iran and Comparison with Adakites in the NE Turkey: Adakitic Melt Generation in Normal Continental Crust,” *Lithos*, 346-347, 105151 (2019), doi: 10.1016/j.lithos.2019.105151.
- Y. Shitaoka, A. Noguchi, Q. H. Mallah, G. M. Veesar, N. Shaikh, and H. Kondo, “Optically Stimulated Luminescence Dating of Dune Sand Sediments in the Western Margin of the Thar Desert at Sindh, Southern Pakistan,” 『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究1』2019年3月、155-160頁。
- Y. Saitoh, T. Nakano, Ki-Cheol Shin, et al., “Utility of Nd Isotope Ratio as a Tracer of Marine Animals: Regional Variation in Coastal Seas and Causal Factors,” *Ecosphere* 9(8) (2018), 1-17. DOI:10.1002/ecs2.2365
- B. K. Khim, J. E. Kim, K. Horikawa, M. Ikehara, Y. Asahara, and J. Lee, “Orbital-Scale Paleooceanographic Response

- to the Indian Monsoon in the Laxmi Basin of the Eastern Arabian Sea,” In Z. Zhang et al. (eds.) *Advances in Science, Technology & Innovation*, Springer, 2019.
- S. Galdenzi, T. Maruoka, “Sulfuric Acid Caves in Calabria (South Italy): Cave Morphology and Sulfate Deposits,” *Geomorphology* 328 (2019), 211–221.
- F. Nouri, Y. Asahara, H. Azizi, M. Tsuboi, “Petrogenesis of the Harsin-Sahneh Serpentinized Peridotite along the Zagros Suture zone, Iran: New Evidence for Mantle Metasomatism due to Oceanic Slab Flux,” *Geological Magazine*, 156 (2019), 772–300.
- 若狭幸・黒澤正紀「セルビア共和国におけるローマ時代・近代～現世の鉱山・鉱山跡における試料採取と顕微鏡観察結果」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究1』、2019年3月、137–141頁。
- 浅原良浩・南雅代・ラズーリ ハディ・アジジ ホセイン「西アジアの古環境復元に向けて：イラン北西部ザグロス山脈に分布する石灰質化学沈殿岩の現地調査報告」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究1』、2019年3月、143–148頁。
- B.-K. Khim, K. Horikawa, Y. Asahara, J.-E. Kim, M. Ikehara (2018), “Detrital Sr–Nd Isotopes, Sediment Provenances and Depositional Processes in the Laxmi Basin of the Arabian Sea during the Last 800 ka,” *Geological Magazine* doi.org/10.1017/S0016756818000596

公募研究

- H. A. Takahashi, M. Minami, T. Aramaki, H. Handa, Y. Saito-Kokubu, S. Itoh, Y. Kumamoto, “A Suitable Procedure for Preparing of Water Samples Used in Radiocarbon Intercomparison,” *Radiocarbon* 61 (2019), 1879–1887.
- H. A. Takahashi, M. Minami, T. Aramaki, H. Handa and M. Matsushita, “Radiocarbon Changes of Unpoisoned Water Samples during Long-term Storage,” *Nucl. Instr. and Meth. in Phys. Res.* B455, 195–200.

【研究項目C01「中世～現代の西アジア都市」】

計画研究5「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」

(論文・著書)

- 守川知子「近世イランの王都の中のキャラバンサライ：『イスファハーンのキャラバンサライ案内』を中心に」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究2』、2020年3月、207–221頁。
- 中町信孝「マムルーク朝時代のアインターブ：アイニー兄弟の「自己語り」を通して」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究2』2020年3月、223–234頁。
- T. Morikawa, “The Study of West Asian History in Japan: A Historical Review and Recent Developments,” *Acta Asiatica (Bulletin of the Institute of Eastern Culture)* 117 <Eastern Studies Emanating from the East: Its Diversity and Possibilities>, The Tōhō Gakkai, Tokyo, 2019, 63–74.
- M. Inaba, “The Narratives on the Bāmiyān Buddhist Remains in the Islamic Period,” B. Auer and I. Strauch (eds.), *Encountering Buddhism and Islam in Premodern Central and South Asia*, Berlin: De Gruyter, 2019, 75–96.
- 守川知子「サファヴィー朝下のイスファハーンと新ジュルファー：近世西アジア都市の非ムスリム街区」新学術領域研究『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究1』、2019年3月、163–172頁。
- 深見奈緒子「初期イスラーム時代の都市からの覚書」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究1』2019年3月、173–189頁。
- N. Fukami, “A Comparison between the Current and 60-year-old Conditions of Sultanate Heritage in Delhi,” Digital archive, Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo, <https://mosai.org.in>, 2019, 1–19.
- 稲葉穰「フロンティアと驚異：11-13世紀イスラーム文献におけるインドの表象をめぐって」『東方学報』京都94冊、2019年、482–462頁（逆頁）。
- 山口昭彦編『クルド人を知るための55章』明石書店、2019年。
- (主催シンポジウム、代表者・分担者発表)
- Workshop: “Sasanian Cities”, The University of Tokyo (19 February 2020), Organized by Morikawa Tomoko.
- Workshop: “Network and Urban Landscape in Historical Perspective”, American University in Cairo (24 August 2019) & Alexandria Library (26 August 2019) Organized by Morikawa Tomoko & JSPS Research Station in Cairo:
- Morikawa Tomoko, “From New Julfa of Isfahan to the World: Armenian Trade Network and a Non-Muslim Quarter in a Capital City”
 - Nakamachi Nobutaka, “From ‘Ayntāb to Cairo: The ‘ulamā Network Seen from al-‘Aynī’s Autobiographical Descriptions”
 - Inaba Minoru, “Trade Network and the Cities in the Indo-Iranian Borderlands”
 - Yamaguchi Akihiko, “Change of Trade Routes and Emergence of Cities in Safavid Iran: Focusing on the Rise of Some Kurdish Towns”
 - Fukami Naoko, “Analysis of Napoleon's Cairo Map”

Workshop: “Baghdad, a 1400 Year Old Capital City in West Asia”, The University of Tokyo (29 January 2019), Organized by Morikawa Tomoko

- Fukami Naoko, “Re-thinking the Round Fortified City of Baghdad from the Urban History of West Asia”
- Yamaguchi Akihiko, “Some Remarks on Early Modern Baghdad”

計画研究 6 「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」

(論文・著書)

- 松原康介 「ダマスクス 1968 年計画におけるヘレニズム基盤の再構築事業」『都市計画論文集』54-3 号、2019 年 11 月、630-637 頁。
- 川本智史 「研究フォーラム トルコ建築史・都市史」『歴史と地理：世界史の研究』728-261 号、2019 年 11 月、51-54 頁。
- 川本智史 「船が買いたい！前近代イスタンブルと海上交通」『都市史研究』6 号、2019 年 11 月、74-83 頁。
- A. Shioya, “The Treaty of Ghulja Reconsidered: Imperial Russian Diplomacy Toward Qing China in 1851,” *Journal of Eurasian Studies* 10-2 (2019), 147-158.
- 松原康介 「戦後仏語圏における「最大多数のための住まい」から「進化型住宅」への展開：ATBAT（建造者アトリエ）の国際・地域交流活動の歴史的経緯に関する研究 その 2」『日本建築学会計画系論文集』760 号、2019 年 6 月、1473-1483 頁。
- *Y. Taniguchi, C. Iba, K. Koizumi, H. Temur, U. Yalçinkaya, F. Açıkgöz, M. Gulyaz, “Scientific Research for Conservation of Rock Hewn Church, Üzümlü (Cappadocia) in 2016: Chapel of Niketas the Stylitis in Red Valley,” 36. *Araştırma Sonuçları Toplantısı 3. Cilt 40th International Symposium of Excavations, Surveys and Archaeometry 07-11 May 2019, Çanakkale*, 529-550.
- 松原康介 「アルジェ・植民都市計画の変遷ーモダニズムの地域性ー」『都市史研究』5 号、2018 年 11 月、55-65.
- 川本智史 「13~15 世紀アナトリア諸王朝の宮殿における高層建造物とその展開」『2019 年度日本建築学会学術講演梗概集』、2019 年、379-380 頁。
- A. Alkazei and K. Matsubara, “The Impact of Reconstruction Planning on Urban Vitality: The Case of Downtown Beirut after the Lebanese Civil War,” *Summaries of Technical Papers of Annual Meeting 2019, Architectural Institute of Japan*, 2019, 747-748.
- 松原康介 「ジョルジュ・キャンディリスの計画論「進化型住宅」における番匠谷堯二の貢献について」『2019 年度日本建築学会学術講演梗概集』、2019 年、943-944 頁。
- 松原康介 (編著) 『地中海を旅する 62 章：歴史と文化の都市探訪』明石書店、2019 年。
- 塩谷哲史 「19 世紀コングラト朝ヒヴァ・ハン国の君主像」野田仁、小松久男編『近代中央ユーラシアの眺望』山川出版社、2019 年、118-139 頁。
- 谷口陽子 「破壊されたバーミヤーン遺跡の再生と文化的アイデンティティ」『世界と日本の考古学：オリブの林と赤い大地：常木晃先生退職記念論文集』六一書房、2020 年、515-532 頁。
- 川本智史 「国父のページェント：ムスタファ・ケマルと共和国初期アンカラの儀礼空間」、小笠原弘幸編著『トルコ共和国 国民の創成とその変容：アタテュルクとエルドアンのはざままで』九州大学出版会、2019 年、97-124 頁。
- 川本智史 「他王朝による征服：オスマン朝とイスタンブルの復興」、「都市の危機と再生」研究会編『危機の都市史：災害・人口減少と都市・建築』吉川弘文館、2019 年、84-105 頁。

公募研究

- 内田隆介, 伊庭千恵美 「カッパドキアの岩窟教会とそこに繁殖する地衣類に対し風雨が与える影響の考察」『日本建築学会近畿支部研究報告集』環境系、第 60 号 2020 年 6 月。
- 三田村哲哉 「仏領におけるユルバニスムの萌芽と興隆：西アジア都市の位置づけ」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』兵庫県立大学環境人間学部、第 22 号、67-79 頁 2020 年 3 月。

領域ホームページ (<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city>) :

「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」(各年度の研究会 [2018 年度に 20 回、2019 年度に 29 回] のプログラム、ならびに主要な研究業績を掲載)

領域年次報告書 :

- 山田重郎編『科研費新学術領域研究 都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 1：研究成果報告 2018 年度 (2019 年 3 月 全 244 頁)
- 山田重郎編『科研費新学術領域研究 都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 2：研究成果報告 2019 年度 (2020 年 3 月 全 316 頁)

7 研究組織の連携体制

研究領域全体を通じ、本研究領域内の研究項目間、計画研究及び公募研究間の連携体制について、図表などを用いて具体的かつ簡潔に1頁以内で記述すること。

本領域研究では、A01（先史時代）、A02（古代西アジア）B01（環境・資源）、C01（中世・現代）の4つの研究項目（そのうちA02とC01にはそれぞれ2つの計画研究があり、全部で6つの計画研究が含まれる）を、総括班がハブとなってまとめている。総括班は、研究項目間・計画研究間の連携を促進・支援するとともに、全体を統括して、「西アジア都市文明論」の構築を見据えた研究成果の総合化を図っている。

ここでの研究者間の連携は、合同研究会や全体シンポジウムの参加にとどまらず、文理合同でおこなうフィールドワークの実施や化学分析機器、測量器、撮影機器などの相互利用、多分野の研究者による共著論文や書籍の作成といった、種々の「協働」による調査・研究活動を含んでいる。ここでは、各研究者の研究成果を領域代表者が「取りまとめる」一方通行の連携ではなく、多くの研究者が相互に参画して共同の研究計画を練り、それを遂行し、互いにフィードバックを得ながら研究を発展させる全領域的協働としての連携を理想とする。

学際的手法によって西アジア都市の諸相を通時的・共時的に解明しようとする本領域を補完する公募研究は、以下の3つの主要分野からなる：

- (1) 本領域研究の中心的課題として含まれなかった時代や地域についての都市研究・地域研究。
- (2) 都市文明論や都市類型論など理論構築の強化に貢献する研究。
- (3) 本領域の物質分析分野の研究を補強しうる自然科学的研究。

これらの公募研究は、その分野が関連する研究項目や計画研究と緊密に連携しており、総括班とも常に連絡し、共同研究会やシンポジウムの企画に参画することで領域全体の活動に関係づけられている。

本領域は、古代西アジア都市の伝統を、都市文明史の最古層にして、長期にわたる都市・人間・環境の相互関係を考察するための最重要の研究分野として位置付け、西アジア都市の古代から現代までの変容を射程に収めながら、人間と環境にとって都市とは何なのかという「都市の本質」を考察する試みである。この構想は、多様な研究分野の研究者を糾合した学際的手法により実施され、歴史的・実証的な研究の上に普遍的・文明論的な考察を積み重ねる過程を含む。各研究計画代表者・分担者・協力者には、総括班から、全体の構想について理解を求め、(1) 独自の調査とデータ分析に基づいた個別研究を実施して、学問の前線を押し上げるような専門的・先端的な研究成果をあげること、(2) 計画研究がカバーする研究分野における既存研究の現状を全体的に把握し、それを批判的に評価すること、(3) 「都市とは何か、都市はどうあるべきか」という普遍的問いに対して社会的にインパクトのある洞察を提示すべく、広い視野からのディベートを重ねること、という「詳細から全体に至る」3つの課題のすべてに取り組む必要をメッセージとして随時送っている。こうした領域の統一的運営に向けてのメッセージを受け、各研究班が、時には自律的に、時には連携しながら、先端的な専門論文と各分野の都市研究を俯瞰するレビュー・アーティクルの双方をまとめつつ、領域全体として、「都市とは何か」を考究するシンポジウムと「総論」の出版計画の詳細を検討している。



8 若手研究者の育成に係る取組状況

研究領域全体を通じ、本研究領域の研究遂行に携わった若手研究者（令和2年3月末現在で39歳以下。研究協力者やポスト、途中で追加・削除した者を含む。）の育成に係る取組状況について、具体的かつ簡潔に1頁以内で記述すること。

【ポスト研究者の雇用とプロモーション】

領域研究初年度（2018年度）に本領域研究のための研究専任の助教（筑波大学、人文社会系担当）の公募を行い、翌年度（2019年後）の4月、5月、9月に以下の3名が、次々と着任した。

(1) 三津間康幸（研究項目 A02、計画研究 2）、専門分野：楔形文字文書（天文日誌）、ギリシア語・アラム語史料を用いたセレウコス朝・パルティア期のメソポタミアの歴史研究（4月着任、着任時41歳）

(2) 板橋悠（研究項目 A01、計画研究 1）、専門：考古学、新石器時代、同位体分析による食性復元（5月着任、着任時32歳）。

(3) Gina Konstantopoulos（研究項目 A01、計画研究 2）、専門：楔形文字学、宗教文化史、古代メソポタミア世界の空間認識（9月着任、着任時33歳）。

以上の3名は、それぞれの専門研究分野において、古代西アジア都市とそれを取り巻く環境世界の研究に取り組みながら、計画研究や領域が企画する研究会で研究発表を行い、年次報告書に論文を執筆したほか、それぞれの分野の専門誌に研究成果を積極的に発表している。また、イラク・クルド地区やトルコでのフィールド調査に参加し（板橋）、大英博物館での粘土板文書調査を行い（三津間）、ニューヨーク大学、UCLAなどの研究会に参加・発表する（Konstantopoulos）など、海外での研究活動も積極的に行って、研究成果をあげながら、自らの研究スキルの向上に努めた。板橋は、2020年度から、筑波大学人文社会系の専任助教（考古学、テニュア・トラック）として採用され、Konstantopoulosは、12月からUCLAに専任助教（楔形文字学、テニュア・トラック）として着任することが内定した。

【研究協力者】

領域のすべての研究項目・計画研究が、ポスト研究者や大学院生を数多く（合計40名程度）、研究協力者として雇用しており、これらの研究者を積極的に西アジア各地（イラク、トルコ、イラン、エジプト、レバノンなど）や欧米でのフィールドワークや国際会議に参画させたり、領域や計画研究が主催する国内外で行う研究会への参加を促したりしている。また、ポスト研究者の中には、本領域で研究協力者として研究した後、2020年度から常勤の研究員（奈良県立橿原考古学研究所、調査部、技師）や准教授（金沢大学、国際文化資源研究センター、特任准教授）のポストを得たケースもある。

【今後の方針】

今後、空席になった筑波大学の助教ポストや各計画研究の研究協力者のポストを積極的に補充して、研究者の育成と領域の研究活動の活性化に努めたい。また、今のところ領域との雇用関係にない若手研究者に対しても、領域の各計画研究のフィールド調査や研究活動への参加者を、ポスト研究者、大学院生に積極的に募り、若手研究者の研究のレベルアップと教育に領域として一定の役割を果たしたいと考えている。

9 研究費の使用状況・計画

研究領域全体を通じ、設備等（本研究領域内で共用する設備・装置の購入・開発・運用、実験資料・資材の提供など）の活用状況、研究費の使用状況や今後の使用計画、研究費の効果的使用の工夫について、総括班研究課題の活動状況と併せて具体的かつ簡潔に1頁以内で記述すること。

【設備・物品の購入と活用】

筑波大学にマルチコレクター型 ICP 質量分析計システム一式を、徳島大学にデスクトップ型 X 線回折装置、走査電子顕微鏡システム、イオンスパッタを導入し、研究環境を整備した（B01：計画研究 4）。これによって考古学遺物の分析プラットフォームを形成し、領域の分析部門としての機能発揮と、冶金考古学的研究を開始する準備が整った。また、文化遺産学・保存科学的研究のための X 線回折装置と工業用顕微鏡、都市遺跡の考古学的景観分析のための各種の光学衛星画像（A02：計画研究 3）ならびに都市計画的な研究のための中東都市多層ベースマップシステム（C01：計画研究 6）を購入し、活用している。その他、物品費の多くは、西アジア考古学、楔形文字学、歴史学、地域研究など領域の関連分野の書籍や研究資料の収集のために使用し、筑波大学西アジア文明研究センター資料室、ならびに筑波大学中央図書館を中心に関係機関に集積し、関係の研究者の使用に供している。

【人件費・謝金等】

平成 31 年・令和元年度（2019 年度）のはじめから、楔形文字学（シュメル語・アッカド語）、古代メソポタミア史（セレウコス朝・アルシャク朝史）、ならびに西アジア考古学（同位体分析、食性復元）を専門とするポストドク研究者 3 名を筑波大学に研究専任の助教として雇用しており、この 3 名は、当該分野の計画研究 1 と計画研究 2 を推進するために中心的な役割を担っている。そのほかに、研究能力の高い非常勤研究員を楔形文字学、考古学の分野を中心に雇用した。

また、領域の活動の事務的拠点である筑波大学西アジア文明研究センターでは、2 名の事務員を雇用して、領域内で行われるほとんどの研究会・シンポジウムならびに会議の運営、広報、出版事業を含む事務作業をおこない、領域全体の活動をサポートしている（X00：総括班）。

その他、トルコ、イラク、エジプトでの発掘調査の協力者への労賃・謝金、地下探査、保存処理の専門家などへの謝金、考古遺物の化学分析費用、英文論文等の校閲料等を計上している。

【海外渡航費】

トルコ、イラク、イラン、エジプト等での発掘調査・現地調査や欧米各国での学会・研究会参加、博物館・図書館での調査・研究、海外の研究者の研究会・シンポジウムへの招聘のため、海外渡航旅費を計上している。

【今後の使用計画】

今後の研究費の使用目的は、これまでの使用方法とほぼ同様であるが、特に注記を要する点を中心に記述する。

研究専任の助教ならびに非常勤研究員については、雇用していた助教が、所属機関（筑波大学）で新たに助教（テニユア・トラック付）に採用されたことをはじめとして、一部転出があり、今後もある程度の転出が予想されるが、速やかに欠員を補って計画研究全体の研究遂行能力を維持するとともに、さらなる若手研究者の育成を図っていく計画である。

国内外の渡航を伴う計画（調査、学会・研究会参加、研究者招聘）に関しては、今般の新型コロナウイルス（COVID-19）感染症の流行に伴う国際的な移動と人的接触の制限によって、計画を変更せざるを得なくなる可能性は低いと思われる。問題が長期化する場合は、調査や研究会・イベントの一部を延期し、公開の研究会や大規模なシンポジウムに代えて Zoom 等を用いたオンラインの研究会や比較的小規模な国際シンポジウムを非公開で実施することを考えたい。この場合は、情勢をみて、予算の繰越しや研究期間の延長も視野に入れ、計画の調整をはかる。

10 今後の研究領域の推進方策

研究領域全体を通じ、今後の本研究領域の推進方策について、「革新的・創造的な学術研究の発展」の観点から、具体的かつ簡潔に2頁以内で記述すること。なお、記述に当たっては、今後公募する公募研究の役割を明確にすること。また、研究推進上の問題点がある場合や、国際的なネットワークの構築等の取組を行う場合は、その対応策や計画についても記述すること。

【研究領域の推進方策】

本領域は、古代西アジア都市研究を、都市文明史の最古層にして、長期にわたる都市・人間・環境の相互関係を考察するための最重要の研究分野として位置付け、西アジア都市の古代から現代までの変容を射程に収めながら、人間はいかにして、どのような都市を生み出し、都市は人間社会と環境に何をもたらしたのかを明らかにして「都市の本質」を考察する試みである。

この構想は、文理融合で多様な研究分野の研究者を糾合した学際的手法により実施され、歴史的・実証的な研究の上に普遍的・文明論的な考察を積み重ねる過程を含む。各研究計画代表者・連携研究者には、全体の構想について十分な理解を求めたうえで、各研究者が取り組む専門性の高い個別研究の遂行とならんで、より視野が広い分野横断的研究や、都市文明についての全体的・普遍的考察を求める。具体的には、以下の3つの課題に並行して取り組む。

- (1) 西アジア都市に関する独自の調査とデータ分析に基づいた個別研究を実施して、学問の前線を押し上げるような専門的・先端的な研究成果をあげること。
- (2) 計画研究がカバーする研究分野における既存研究の現状を全体的に把握し、それを批判的に評価すべく、データの収集とレビューを行うこと。
- (3) 「都市とは何か、都市はどうあるべきか」という普遍的問いに対して社会的にインパクトのある洞察を提示すべく、広い視野からの超分野的ディベートを重ねること。

こうした方針は、全体会議を通じてメッセージとして各計画研究のメンバーに伝達される。各計画研究班は、時には自律的に、時には他の計画研究班と連携しながら、先端的・専門的研究を推進して学術成果をあげながら、各分野における都市研究を俯瞰するレビュー・アーティクルを作成して、都市研究を広く視野に収めることに努力する。

総括班は、各計画研究班のフィールド調査や研究を支援して個別の調査・研究の推進を助けるとともに、全体としての「総論」の形成に向け、領域全体を主導し、「西アジア都市の特徴」や「都市とは何か」を自由に考究する研究会や、シンポジウムを企画、開催し、これらの活動の成果をとりまとめる。5年間の領域研究期間の終了後、1年以内を目標に、今後の西アジア都市研究の国際的なスタンダードになる英文研究叢書 (*Historical Aspects of West Asian Cities*, 全5巻) を公刊し、その後、さらに幅広い読者を対象とした書籍 (まずは和文で) も作成して、一般にもわかりやすく「古代西アジアの都市文明に照らして、都市文明とは何であり、その将来の持続的発展のためには、我々は何を知り、何を行うべきなのかについて」提言を示したい。(英文叢書の出版は、5年間の研究期間中に準備し、研究期間終了後の1年以内に速やかに行う。)

5巻一組の英文叢書の企画は、以下のような構成でおこなう。

1. *Toward the City: Environment and Complex Society in the Lithic Period* (計画研究 1+4)
2. *Cities in the Ancient Mesopotamia and Its Surroundings: Development and Variation* (計画研究 2+4)
3. *Cities in the Ancient Egypt: The Structure of the Cities and Its Cultic Meaning* (研究計画 3)
4. *Medieval to Modern Cities in West Asia: Characteristics and Issues* (計画研究 5)
5. *Modern Cities in West Asia: Characteristics and Issues* (計画研究 6)

この叢書作成にあたって、各巻の目次・構成については、巻ごとに個性を尊重するが、内容的に以下の条件を満たすものとする：

- (1) 都市景観や都市構造を視点の中心に据えたうえで、景観・構造と自然環境・人間社会の相互関係を探る意識を持って各巻を作成する。
- (2) 年代的な視点をもって、時代の変遷とともに生じる都市空間と都市社会の有り様を俯瞰することのできる内容をもたせる。結果的に、各巻は書物として通読することで、西アジア(あるいはエジプト)の都市の歴史的変遷と興亡、ならびに都市ごとの特徴が理解できるようにする。
- (3) 西アジア地域全体を俯瞰する意識を持って作成する。

この叢書作成を活動の一つの基準として設定し、このゴールに向かって研究会・シンポジウムを企画し、国内外の有力な研究者に領域の研究活動と出版事業に参加してもらうことで、国際的な基準に照らした最新の研究成果を収集し、バランスのとれた、「西アジア都市研究の総論」を生み出すことを目指す。

【今後公募する公募研究の役割】

公募研究の役割は、学際的手法によって西アジア都市の諸相を古代から現代までの射程で、通時的・実証的に解明する際に生じる不足を効率的に補うことである。これまでには、(1) 本研究領域の中心的研究課題に含まれていない地域や時代についての都市の諸問題に取り組む研究、(2) 都市を考察するための理論構築の強化に貢献する研究、(3) 物質科学的分野の研究を補強し得る自然科学的研究、(4) 現代の都市問題の解決に資する実学的研究、の4分野で公募研究を企画してきた。

今後、この基本方針を大きく変更する必要はないと考えるが、領域研究が研究期間の後半に入り、「総論」の取りまとめが求められる中で、これまで以上に(2)の「都市を考察するための理論構築の強化に貢献する研究」の補強が必要である。特に(A)都市の類型学的あるいは文明論的研究、(B)現代都市(地域は問わない)の社会的・環境的課題についての人類学的研究、(C)メガシティ(地域は問わない)の景観・社会構造・人口問題についての研究、(D)都市と村落の相互関係についての歴史学的・人類学的・社会学的研究、(E)災害・疫病と都市についての諸研究、といった課題に関心をもつ研究者を対象とする公募案を策定し、これらの研究課題への取り組みを積極的に領域全体の研究会・シンポジウムに取り込んでみたい。

【研究推進上の問題点と対応】

西アジア地域における政情は、これまでのところは、急速にして深刻な悪化はみられておらず、ほとんどの調査は概ね順調に行われてきた。しかし、この3月からの新型コロナウイルス(COVID-19)の世界的流行は、研究活動に深刻な停滞をもたらした。今年度4月～6月までの予定していた全体会議、研究会、(6月)は、すべて中止、あるいは延期された。6月20日・21日には、海外からの研究者を多数招聘して、領域全体の企画としてシンポジウムを予定していたが、これも来年の2月あるいは3月に延期されている。

今回の事態は、世界的な規模で、人的接触・交流を制限するものであり、今後の調査、研究会、シンポジウム等の企画が遅延することは必定といえる。特に、海外でのフィールド調査や学会参加、海外からの研究者の招聘を伴うイベント、大人数を集めての公開で行う研究会やシンポジウム等に関しては、当面、実施が難しい状況が続くことを覚悟しなければならない。これに対する方策としては、公開で行うイベントを非公開とし、大規模の研究会・シンポジウムを小規模の複数なイベントとすること、また、一部の研究会や会議をZoom等のプログラムを活用して、オンラインで実施する試みを進めたい。海外でのフィールド調査が行えない分野については、これまでに収集された研究資料の整理・研究といった面に多くの仕事が累積していることから、これに注力するチャンスと捉え、研究の進展と研究成果の取りまとめの一層の推進を目指す。また、海外渡航を含む調査・研究や集会の多くが実施不可能となった場合には、研究費の一部を次年度以降に繰り越して実施することや、研究期間そのものを延長することも考え、今夏8月までに研究計画の見直しを行いたい。

11 総括班評価者による評価

研究領域全体を通じ、総括班評価者による評価体制（総括班評価者の氏名や所属等）や本研究領域に対する評価コメントについて、具体的かつ簡潔に2頁以内で記述すること。

I am very impressed with the structure and output of the “Essence of Urban Civilization” project. The collaborating scholars have focused on the central themes in scholarship on West Asian cities, from origins to today. The six Research Groups are targeted and are led and staffed by very competent scholars in their respective fields.

All Research Groups have been productive, but I am especially impressed with Research Group 02 “Urban Landscape and Functions of Ancient West Asia,” under the leadership of Prof. Shigeo Yamada. This group in particular has a high academic profile in the international academic community, and it has a leading role in the nascent archaeology of the Kurdistan Region of Iraq, where I know from personal experience that it has the deep respect of the leadership of the Directorate of Antiquities (this is also true of the projects under Research Group 01: “Subsistence Economy and Social Structures in Prehistoric West Asia). The excavation projects in Kurdistan at Yasin Tepe and Jarmo are among the most exciting, in my opinion, of any projects anywhere in West Asia at present.

The Seminars of the Projects are frequent and well-attended, and include a diversity of Japanese and international scholars. I participated in a Group 02 seminar in January 2019, which was an excellent intellectual experience. I was deeply impressed with the vibrant academic community brought together by the Project. The scholars of the Research Group are asking questions of great historical importance and attempting to answer them using the best of traditional methods (e.g., excavation and survey) and newer techniques (unmanned aerial vehicles, geophysical survey, immersive 3D visualization).

The public funds provided by MEXT to the Essence of Urban Civilization project are generating meaningful scholarship on ancient West Asia. I am eager to see what we will learn from its second half.

5 May 2020

Prof. Jason Ur,

Department of Anthropology,

Harvard University

新学術領域研究『都市文明の本質』計画研究 02「古代西アジアにおける都市の景観と機能」は、前 4 千年紀から後 3 世紀まで、すなわち西アジア各地において都市化が加速された前 4 千年紀からアルシャク朝（パルティア）の時代までをあつかっている。伝統的な楔形文字学（アッシリア学）の研究枠には含まれないパルティア期までを、イラン、イラク地域における都市文化の継続性をふまえ、計画研究の対象としたのは卓見であった。またこれはイスラム都市を研究対象とする計画研究 05 との連結のうえでも重要であり、今後両グループがパルティア、ササン朝研究をつうじて、より緊密に連結されることを希望する。

前 1 千年紀とりわけアッシリア期およびそれ以後の西アジア各地の都市プラン、政治過程における都市についての諸報告によって、本計画研究がおおきく進展したことは確実である。前 2 千年紀前半のマリ、中葉のエマルについての情報も得られた。またイラク考古学者の報告によって、イラクにおける前 3、

2 千年紀遺跡発掘についての新情報が得られたことも貴重であった。本計画研究におけるイラク考古学者との緊密な連携が、我国の南部イラク考古学調査再開への力となることを切望する。ただ本研究ではまだ、前4千年紀末から2千年紀にかけての南部バビロニア諸都市の研究は、手薄と言わざるを得ない。これは、南部イラクでの考古学発掘・調査が長期中断し、さらに欧米、日本でも都市化プロセス研究の関心が薄れたこととも関連するが、この時期についての研究は、やはり本領域研究副題にみえる「古代西アジアにおける都市の発生」解明の核ともなるべきであろう。次年度以降の進展におおいに期待する。たとえば、ウルク中期以降の南部メソポタミア都市社会の進化、都市と農村、個別南部メソポタミア都市（たとえばニップル、ウルク）の連続性と変容などについての報告（海外研究者でも可）を受けることは不可能であろうか。

令和2年5月31日
京都大学名誉教授
前川和也

本新学術領域研究は、西アジアを舞台とした古代都市の発生と発展・衰退といった変遷を、学際的な視野で解明しようという大変野心的な取り組みである。学際的というのは言うに易いが、異分野間での連携は意外と取りにくいものである。学際的といいながら、それぞれの分野に閉じた個々の研究が行われているだけ、ということがよくある。しかし本新学術領域研究では、考古資料に対して最先端の分析手法を取り入れ、客観的なデータに基づいた議論を進めようという真摯な研究姿勢が認められる。たとえば新石器人の食性を人骨安定同位体比から類推した研究、古代西アジアにおける金属利用を金属元素の同位体比から産地を推定した研究、微量元素組成に基づくイラク〜トルコの黒曜石石器の産地同定、などは地球科学の最新の分析手法を駆使して研究が進められている。こういった精緻な分析のためには、日頃から分析機器のメンテナンス、標準試料やバルクの定期分析、といった表には出てこない日々の努力の積み重ねが必要である。そういった努力のもとで精緻なデータに依る新しい議論が展開されており、さらなる発展が期待される。

また本新学術領域研究では、研究会や講演会、国際ワークショップを頻繁に開催され、海外研究者の登壇が非常に多い。海外研究者が発表した研究会・講演会は、平成30年度と令和元年度にそれぞれ11件ずつ計22件開催された。そもそもの研究対象が西アジアという海外であることも理由の一つであろうが、この積極的な開催は当該分野の世界的動向を見極め、牽引していこうという気概が感じられる。残念ながら新型コロナウイルスの影響で、国際的な研究交流が滞りがちになることが懸念されるが、オンラインでの研究会・ワークショップの開催を模索することで打開されるであろう。

一方で本新学術領域研究では、現代の都市主導型文明の持続可能性を模索することを目標としている。従来から課題であった鉱産物資源の制約、気候変動による都市への影響といった現代都市文明にも通じる課題を取り上げている点は大いに評価できる。しかし現代文明を考える上で、都市への人口集中はかつてないほど進んでいる。今年に入ってから新型コロナウイルスの蔓延は、都市の在り方を根本から問い直させようとしているかにみえる。元来の研究計画にはないものの、悠久の歴史を経た西アジアの都市においてウイルス感染症蔓延の歴史があるならば、ぜひ課題の一つとして取り上げて欲しいと思う。

これまでのところ本新学術領域研究は順調に推移しており、さらなる進展が見込まれると評価される。

令和2年5月12日
大谷大学・社会学部・教授
鈴木寿志